

新刊紹介・嚙入について

中村吉治・島田隆・矢木明夫 著

解体期封建農村の研究

一 諏訪藩今井村一 (四月下旬刊行予定、朝文社)

A 5 版 七七四頁 定価五五〇〇円

- 第一章 はじめに
- 第二章 幕藩体制と諏訪藩
- 第三章 近世中期の商品経済と地主制
- 第四章 近世後期の商品経済
- 第五章 近世後期の地主制
- 第六章 農村構造の変動
- 第七章 幕末藩政の展開と地主制

本書は、近世幕藩体制を解体期封建社会としてとらえ、この期の村落共同体の変容と、その資本主義化の過程を、諏訪藩今井村および周辺諸村(現在諏訪市地域)について、過去五十年にわたる、具体的に調査研究をした成果である。その間、文部省・毎日新聞社・ハーバード大学燕京研究所からの助成を得て一稿の完成を見たものである。

ときに本書の研究テーマは「村落構造の史的分析」において、南北諸藩山村における村落共同体の形成、その上に成立する封建的土産所有、制度上の村の性格を明らかにし、さらに其共同体の発生過程を大正末期まで追究した。

本書は右の研究を礎石としてふきえながら、近世期のいわゆる封建的性質に属する通説を、換地、石高制、村の性格を史的に明らかにすることによって批判し、幕藩体制の積極的を性格規定を行なった。そして製糸・織打を中心とした商品経済の展開、地主制の成立を農村構造の変動と関連させつつ、藩政期より明治末期にわたって検出し、資本主義発展の前提条件を追究した。

右のよりの内容の全体を一貫する基本的な問題は、やはり村落構造の変化である。その

ためにも、今までにない試みとして寛文期から明治期までの今井村全体の各家の系譜を、「今井村家系譜」という大部を別表として取り、研究者の参考に資しよう。さらにこれらの家々が形成するいわゆるマキ同族集団が社会経済生活においてどのような内容変化をたげるか、マキの祖み替え、マキの概念化などの現象について検証した。この過程が、ひいては幕末期農村構造変動のシムボルとして、大前正徳と小前百姓の対立をめぐる、「小前騒動」に発現するのであるが、この問題の経過と本質についても、今井村と小井川村を例として詳細に追究した。

また全篇にわたって、近世・近代の村落社会研究の尤も利殖価値の高い図・表などの資料を豊富に採録している。

ともあれ、徳山村の研究にひきつづき、この今井村の研究を公けにすることによって、社会学をはじめ社会科学諸部門の間で統一的本村落研究をおしすすめるに一つの寄与をなし得るものと、ひそかに信じている。

学究書出版困難の折から、会員諸賢におかれては本書の贈入をらびに諸機関への斡旋方をあてがうからい下さいますようお願いを、あわせて御申込の節は特記二割引(八〇〇円と送料一〇〇円)でお世話し致します。

御申込の際は、ハガキにて左記宛に、御住所、芳名、職人・公費別の部数と、必要を限り、見送り・請求書の枚数を御指示下さい。(予約御申込先) 仙台市片平丁

東北大学経済学部・日本経済史研究室

中村吉治